

# 康僧会と建初寺

## ——寺号の由来について——

伊 藤 千 賀 子

### 1. はじめに

本稿は 3 世紀半ばの三国時代に南京に建てられたという建初寺について考察する。

中国の江南地方にはじめて仏教を伝えたのは支謙であったという。後漢の末に動乱をさけて呉国へやってきた支謙は、孫権が呉王朝を建国した 222 年から亡くなる 252 年まで建業（現在の南京）に住まいし、多くの経典を訳出した。しかし優婆塞だったためか、寺の建立には思いがいたらなかったようである。

一方、孫権の晩年の 247 年、康僧会はベトナムから建業へやってきた。神通力によって、孫権を信服させ、建初寺は建立された。『梁高僧伝』には「(仏舎利の出現を目の当たりにして) 権 大いに嗟服して、即ち為めに塔を建つ。初めて仏寺あるを以ての故に、建初寺と曰ふ。」<sup>1)</sup> とあるが、洛陽にはすでに寺院があったのであるから、ここでの初めてとは、どのような意味なのであろうか。例えば①孫権にとってはじめてなのか。②康僧会にとってはじめてなのか。③呉国にとって初めてなのか。④江南地方にはじめてなのか。⑤それ以外の意味なのか。

### 2. 建初寺の歴史

〈金陵仏寺大観 2003, p. 493L〉<sup>2)</sup> に次のように記されている。

建初寺は昔の宮城の南 7 里にある。呉の大帝の赤烏 10 年 (247) 康居の人である康僧会は初めて建業にやって来た。茅葺きの庵を営み、像を設けて修行に励んだ。大帝は会のためにここに塔を建てた。金陵に初めての仏教寺院である。故に建初と号した。ならびにその地を仏陀里と名づけた。寺の前に大市を立てたため、大市寺と呼ばれた。東晋咸和 (326-334) 蘇峻の乱に塔は焼失した。司空何充が復し修造した。平西將軍趙誘は寺の東に小塔を建てた。宋元嘉 (424-453) 中、鳳がこの山に翔集したことがあった。そこで鳳凰台を寺の側に建てた。南朝の高僧支曇籥、帛尸黎密、道儒、僧佑たちはみなこの寺にいた。また瓊法師がおり、像法を護持して人倫を吸引した。亡くなってから陳の

(60)

## 康僧会と建初寺（伊 藤）

江総は碑を立てた。唐の貞観（627-649）初年に懶融和尚もここで亡くなった。宋に法性寺と称した。建炎年間（1127-1130）に火事にあい、寺は廃された。かろうじて法性と書かれた額が残った。寺は復建され、3つの建物となった。東は石仏院、西は前法性寺・後法性寺である。元末には存在したが、明にいたっては伝えられていない<sup>3)</sup>。（下線は伊藤，以降も同様）

上記には「金陵で初めての寺院であ」ったから、つまり金陵で初めて建てた寺だから建初寺と名づけたとある。初めて建てた寺なら、「初建寺」のほうがふさわしいのではないか。

## 3. 初めての寺院という記述

3.1. 建初寺の名前の由来を記す『大正蔵』の記事は、全部で約10箇所ある。これらの内容は以下の3種になる。

- a) 以始有仏寺故号建初寺。<sup>4)</sup>（「最初の仏教寺院なので建初寺と呼」<sup>5)</sup>んだ。）
- b) 教法初興故名建初寺焉。<sup>6)</sup>（教法がはじめて行われたことから、建初寺と名づけられた。）
- c) 又為寺奉会居焉額曰建初。江南寺塔此為始也<sup>7)</sup>。（孫権は）寺を建立して、康僧会に献じた。額に建初とした。これが江南の寺塔の初めである。

3.2. 近年の論文の多くは建初寺を江南ではじめての寺院と記している<sup>8)</sup>。

- a) 康僧会の本領は実践布教にあり、呉主孫権を帰信させ、江南にはじめて建初寺を建立した。（『仏教史概説：中国篇 1968, p. 19』）
- b) （康僧会は）247年呉の孫権（南京）にいたり、はじめて江南に仏寺をたて、建初寺と号した。（『アジア歴史事典 1985』「康僧会」の項、牧田諦亮 1960）
- c) 孫権はその霊驗に感じて江南にはじめて仏寺を建てて建初寺と号し、その地を仏陀里と名づけたという。（鎌田茂雄 2001, p. 27）
- d) 247年（赤烏 10）康僧会（?-280）建業に来る（一説 241 年）。孫権 建初寺を創建して住持させる。江南で最初の寺院となる。（『仏教の東伝と受容 2010, p. 367 年表』）
- e) 建初寺は呉の康僧会の時代に江南に初めて建立された寺院。（『高僧伝』(1) 訳 2009, p. 103 註 (1)）

## 4. 建初寺以前の寺院

建初寺以前にも、江南にはいくつかの寺院が存在した。

## 4.1. 予章の東寺

安世高が予章（現在の南昌）に建てた寺。「安世高は2世紀ごろの人。パルティ

アの皇太子であったが、父の死によって無常を強く感じ、出家修行した。経蔵に博通し、とりわけ阿毘曇の学に精通し、中国の禅法は彼からはじまったと言われる。各地を行脚して教化を行い、後漢の桓帝（147-167）の初めに洛陽に到着した。以来20年間に『安般守意経』など176部の訳経をなした。訳経が終わると後漢末の黄巾の乱をきっかけとした戦乱期に入り、江南に趣いた。<sup>9)</sup>「廬山（ろざん）から予章に到り、東寺を建立した<sup>10)</sup>。さらに広州をめぐり北上して会稽に来た時、市井の乱闘に巻き込まれて命を落とした。」<sup>11)</sup>

#### 4.2. 武昌の昌樂寺・慧宝寺・徳潤寺

- (1) 黄初元年（220）呉主孫権は武昌に昌樂寺を建てた<sup>12)</sup>。
- (2) 太和3年（229）呉の潘夫人は武昌に慧宝寺を建てた<sup>13)</sup>。
- (3) 尚書令闕沢は舍宅を徳潤寺とした<sup>14)</sup>。

建初寺の20年以上前の220年と229年に孫権と夫人が武昌に昌樂寺と慧宝寺を建立している。また闕沢が尚書令となったのは、孫権が皇帝の即位にともなうてであるから、229年である。同時に都を建業に遷した。闕沢が中書令となったのが232年以降。遷都とともに武昌の家宅は必要なくなり、家宅が寺となったのは、229年9月以降232年までの間ということになる<sup>15)</sup>。

### 5. 建初寺の寺号の意味

少なくとも、予章に東寺、武昌に昌樂寺・慧宝寺・徳潤寺が存在したのだから、この初めてというのは江南ではなく、呉国でもなく、孫権でもない。もっと単純に考えてみよう。都の名が建業なのだから「建業で初めての寺」という意味なのではないか。

### 6. ベトナムの建初寺

今現在、ベトナムの首都ハノイ近くに建初寺という名の寺院が存在する<sup>16)</sup>。

ベトナムに仏教が伝わったのは2世紀で、その地はルイ・ロウという。現在のハノイの東側である。「ルイ・ロウは中国の後漢の末期に、ベトナムが中国の支配下にあって、その交州の太守であった士燮（在位187-226）が都と定めた地であった。ルイ・ロウには、2世紀にインドからの仏教僧が、海路や陸路にてやってきていた。この地はベトナムに仏教が伝わる最初の中心地であった。」<sup>17)</sup>「建初寺は、正確にいつ創建されたのか、不明である。仏教が先のルイ・ロウに伝わった1世紀頃よりやや後のころ建てられたともみなされる。また一説によると、感

誠禪師 (?-860) は、阮氏という方の家をもらい受けて、それを寺としたともいわれている。」<sup>18)</sup>

すなわち、創建された年には、①1世紀ごろよりやや後②9世紀の2説がある。もし、建初寺が1世紀ころよりやや後、仮に2世紀だとすると、3世紀にハノイで出家した康僧会がこの建初寺で修行したことは十分考えられる。さらに、会が建初寺の僧侶であったのなら、建業の寺の名を建初寺としたのは、ベトナムで自分が修行していた寺の名をそのままもらい受けたのではないだろうか。

おそらく康僧会は孫権に「建業で初めての寺院だから、建初寺という寺号はいかがでしょう」と進言したとおもわれる。孫権は何の疑いも持たず、それを信じていたに違いない。

後世に再建されたという現在の建初寺の建物の写真は〈伊東 2005〉の「図版 10」に載っている。また YouTube に 5 分強だがベトナムの建初寺がアップロードされている<sup>19)</sup>。

## 7. まとめ

長い間、康僧会のために孫権が創建した建初寺は江南で初めての寺院といわれたきた。しかし、247 年の建立以前、江南にはすでに、予章には安世高による東寺、また呉国の最初の都であった武昌には孫権による昌樂寺、潘夫人による慧宝寺、闕沢による徳潤寺という 4 箇寺が存在した。よって建初寺は江南で最初の寺院ではない。建初寺とは建業で初めての寺という意味である。また、康僧会は現在のベトナムのハノイ近くで育ち、10 代で商人であった両親がともに亡くなったため、僧侶となった。彼がベトナムで修行していた寺院が建初寺であり、その寺号をとって、建業の寺を建初寺と名付けたのであろう。

1) 〈梁高僧伝 519, p. 60a19〉。『国訳一切経 史伝部 7』（改訂第 2 刷 1988, 初版 1936, p. 15) 参照。

2) 閲覧に際しては、田辺和子先生と引田弘道先生よりご尽力をたまわりました。厚く御礼申し上げます。

3) 〈金陵仏寺大観 2003〉によれば、東呉時代 (222-280) 金陵に建てられた寺院として建初寺が 1 箇寺記載されているだけである。他に寺院は建てられなかったようである。ちなみに東晋代 (317-420) は 37 箇寺、宋代 (420-479) には 60 箇寺が記載されている。

4) 「以始有仏寺。故曰建初寺。」『高僧伝』（『大正蔵』no. 2059, vol. 50, 60a19）。前後も含め同文の經典は、以下の 6 經典になる。『歴代三宝紀』（『大正蔵』no. 2034, vol. 49, 59c4-5）、『神僧伝』（『大正蔵』no. 2064, vol. 50, 49c21）、『出三蔵記集』（『大正蔵』no.

- 2145, vol. 55, 96b28), 『大唐内典録』(『大正蔵』 no. 2149, vol. 55, 230b16), 『開元釈教録』(『大正蔵』 no. 2154, vol. 55, 490c19), 『貞元新定釈教目録』(『大正蔵』 no. 2157, vol. 55, 788a18).
- 5) 訳文は〈『高僧伝』(1) 訳 2009, p. 70〉による.
- 6) 『広弘明集』(『大正蔵』 no. 2103, vol. 52, 99c24-25), 『集古今仏道論衡』(『大正蔵』 no. 2104, vol. 52, 365a4-5), 『金剛暎卷上』(『大正蔵』 no. 2734, vol. 85, 55b1-2) の3経典は前後も同文. 少々文章が異なるが, 「初建伽藍崇重仏法其寺称建初寺」(『四座講式』(『大正蔵』 no. 2731, vol. 84, 905c2-3)) も同様とみていいだろう.
- 7) 『釈子稽古略』(『大正蔵』 no. 2037, vol. 49, 771c13-14).
- 8) 三国時代, 揚子江の南には, 蜀と呉の2国があった. しかし, 蜀には仏教が伝わらなかった. 『高僧伝』にも蜀に対する記述はまったく見当たらない. したがって, ここでいう江南とは呉国を指す.
- 9) 〈出三蔵記集 515〉(『大正蔵』 vol. 55, 95c2) と 〈梁高僧伝 519〉(『大正蔵』 vol. 50, 323c17) は東寺, 〈インド仏教人名辞典 p. 26〉は大安寺.
- 10) 〈インド仏教人名辞典 p. 26〉参照.
- 11) 〈劉継生 2008, p. 136 注 8〉. 〈梁高僧伝 519〉(『大正蔵』 vol. 50, 323c16-17) には, 過去世と現世との輪廻転生の話の後に「達予章. 即以廟物造東寺.」とある.
- 12) 黄初元年呉主孫権於武昌建昌樂寺. 〈仏祖統紀 1269〉(『大正蔵』 vol. 49, 331b25)
- 13) 太和三年呉潘夫人於武昌建慧宝寺. 〈仏祖統紀 1269〉(『大正蔵』 vol. 49, 463b24)
- 14) 尚書令闕沢舍宅為徳潤寺. 今普濟寺是. 〈仏祖統紀 1269〉(『大正蔵』 vol. 49, 463b22-25)
- 15) 224 年に, 維祇難が竺律炎とともに武昌にやって来て『曇鉢經』のテキストをもたらしたが, 孫権の昌樂寺に滞在していたのであろう.
- 16) 建初寺の位置については, 岩月純一先生にご教示をたまわりました. 厚く御礼申し上げます.
- 17) 〈伊東照司 2005, pp. 18-19〉.
- 18) 〈伊東照司 2005, p. 26〉.
- 19) <http://www.youtube.com/watch?v=7q-0y3h4qfU>.

#### 〈引用文献・参考文献〉

- 〈アジア歴史事典 1985〉『アジア歴史事典』平凡社.
- 〈伊東照司 2005〉伊東照司『ベトナム仏教美術史入門』雄山閣.
- 〈インド仏教人名辞典 1987〉三枝充恵編『インド仏教人名辞典』法蔵館.
- 〈石川忠久 1987〉石川忠久「南京物語——江南佳麗の地」『中国の都城』7, 集英社.
- 〈鎌田茂雄 2001〉鎌田茂雄『新中国仏教史』大東出版社.
- 〈金陵仏寺大観 2003〉楊新華主編, 黄継東・呉合沢副主編『金陵仏寺大観』方志出版社.
- 〈『高僧伝』(1) 訳 2009〉慧皎著, 吉川忠夫・船山徹訳『高僧伝』岩波書店.
- 〈出三蔵記集 515〉釈僧祐撰『出三蔵記集』, 『大正蔵』 no. 2145, vol. 55.
- 〈禅宗史蹟調査 2005〉鈴木哲夫・鄭夙雯「江蘇地方の禅宗史蹟調査」『人間文化 愛知学

(64)

康僧会と建初寺（伊 藤）

- 院大学人間文化研究所紀要』20, 1-37.
- 〈大蔵経全解説 1998〉鎌田茂雄・河村孝照・中尾良信・福田亮成・吉元信行編『大蔵経全解説大事典』雄山閣出版.
- 〈中国史人名辞典 1984〉外山軍治・日比野丈夫編『中国史人名辞典』新人物往来社.
- 〈東洋歴史大辞典 1986〉下中弥三郎編『東洋歴史大辞典』臨川書店.
- 〈任繼愈 1997〉任繼愈主編『中国仏教史』1, 中国社会科学出版社, 初版 1985.
- 〈任繼愈 1992〉任繼愈主編, 丘山新・小川隆・河野訓・中條道昭訳『定本中国仏教史』1, 柏書房. 原本:『中国仏教史』中国社会科学出版社, 1985.
- 〈仏教史概説: 中国篇 1968〉野上俊静・小川貫弑・牧田諦亮・野村耀昌・佐藤達玄共著『仏教史概説: 中国編』平楽寺書店.
- 〈仏教の東伝と受容 2010〉沖本克己編『仏教の東伝と受容』新アジア仏教史 6, 佼成出版社.
- 〈仏祖統紀 1269〉志磐撰, 『大正蔵』no. 2035, vol. 49.
- 〈劉繼生 2008〉劉繼生「山東仏教の成立と変容過程」『通信教育部論集』11 号.
- 〈梁高僧伝 519〉慧皎撰『高僧伝』, 『大正蔵』no. 2059, vol. 50.

〈キーワード〉 康僧会, 建初寺, 江南, 呉, 建業, 武昌, ベトナム, 三国時代  
(大東文化大学非常勤講師)

## 新刊紹介

多田 孝正 著

### 天台仏教と東アジアの仏教儀礼

A5 版・722 頁・本体価格 22,000 円  
春秋社・2014 年 6 月